

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	栗林 文夫
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 中世南九州の寺社と地域社会			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		本多 博之 教授	
審査委員 (Name of the Committee Member)		奈良 勝司 教授	
審査委員 (Name of the Committee Member)		渡邊 誠 准教授	
審査委員 (Name of the Committee Member)		殷 暁星 助教	
審査委員 (Name of the Committee Member)		日隈 正守 教授 (鹿児島大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、中世南九州、とりわけ大隅正八幡宮と台明寺を対象とし、宗教史の観点から、寺社と地域社会の関係性について具体的に検討したものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。 序論では、問題の所在を明らかにした。中世南九州における宗教実態と、民衆と寺社の多様なあり方について考察するとした。</p> <p>第1部第一章では、総論として、起請文等の神文に見える八幡信仰や、南九州での八幡神社のあり方等を概観した。</p> <p>第二章では、全国の「正八幡」について、大隅正八幡宮とどのような関係にあるのか検討した。</p> <p>第三章では、石清水八幡宮寺が別宮である正八幡宮をどのように支配したのか、その全体像を明らかにした。補論一では、石清水八幡宮寺が南九州三ヶ国の別宮・荘園をどのように支配したのか、その支配の特質を掘り下げた。補論二では、石清水八幡宮寺の宿坊「泉坊」を取り上げ、関連史料を検討し、中世後期から近世前半までの石清水八幡宮寺と島津氏との関係の一端を素描した。</p> <p>第四章では、正八幡宮と鹿児島湾に浮かぶ桜島との古代・中世における関係史を概観し、桜島の置かれた歴史的特質を明らかにした。</p> <p>第2部第一章では、曾於郡に鎮座した台明寺について、成立から発展の過程を論じた。第一節では、成立期の台明寺について考察した。第二節では、寺僧集団について考察した。第三節では、寺領構造について考察した。第四節では、祈禱寺院としての台明寺の性格変化を、時代毎に跡づけた。第五節では、国分寺との関わりについて考察した。</p>			

第二章では、原本調査の成果をもとに「台明寺文書」について考察した。補論一では、台明寺文書に散見される「止上居取」について、その語義と現在に至るまでの変遷を史料に基づきながら考察した。

結論では、本論で明らかにした成果を、中世大隅国の歴史過程の中に位置付けた。最初に、中世前期の大隅国全体の宗教構造を、正八幡宮・台明寺・国分寺と国衙を中心に再確認した。次に、正八幡宮を中心にした宗教的空間について考察した。続いて、九州五所別宮体制について論じた。最後に、残された課題について言及した。

審査においては、八幡信仰・八幡社の実態や大隅正八幡宮と台明寺の関係、台明寺と国衙・国分寺との繋がり、そして石清水八幡宮の九州八幡社に対する支配秩序とも言える「九州五所別宮体制」などについて、さまざまな質問が出され、栗林氏が回答した。

本論文は、廃仏毀釈により多くの古文書・古記録が失われるなど、恵まれない史料環境の中で精力的に史料調査を実施し、中世南九州における宗教状況について大隅国の正八幡宮と台明寺を通して具体的に明らかにし、石清水八幡宮寺や島津氏との関係、地域社会において寺社の果たした役割について論じた好論であることを審査委員全員が認め、合格と判定した。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 中世南九州における宗教関係資料を博搜し、丹念な分析をおこなっている。
2. 大隅正八幡宮と台明寺の人的交流（行賢ほか）を明らかにした。
3. 台明寺が創建当初から国衙と関係が深く、霊窟から寺院に発展した過程を明らかにした。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 8月 2日

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)